一九三四年冬——乱歩

久世光彦

九三四年冬——乱歩

久世光彦

集英社

久世光彦（くぜ・てるひこ）

1935年、東京生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。東京放送（TBS）を経て、1979年、カノックスを設立。演出家。1992年、『女正月』の演出により芸術選奨文部大臣賞を受賞。著書に、『昭和幻燈館』（晶文社・中公文庫）、『花迷宮』（平凡社）、『怖い絵』（文藝春秋）、『触れもせで――向田邦子との二十年』（講談社）、『蝶とヒットラー』（日本文芸社　第3回 Bunkamura ドゥ マゴ文学賞受賞）がある。

一九三四年冬――乱歩

一九九三年一二月二〇日　第一刷発行
一九九四年　四　月一〇日　第四刷発行

著　者／久世光彦
発行者／若菜　正
発行所／株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇　〒一〇一―五〇
電話　〇三（三二三〇）六一〇〇【編集部】
　　（三二三〇）六三九三【販売部】
　　（三二三〇）六〇八〇【制作部】
印刷所／大日本印刷株式会社

©1993 TERUHIKO KUZE, Printed in Japan

ISBN4-08-774045-5 C0093

検印廃止
乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

序章　張ホテル　5
第一章　梔子姫　15
第二章　ミセス・リー　60
第三章　偏奇館主人　96
第四章　唖者の声　148
第五章　ポインセチアの秘密　191
第六章　神々の蝶　229

装画　桜田　晴義
装幀　中島かほる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九三四年冬——乱步

序章　張ホテル

微かに身じろぎすると、洋風のバス・タブいっぱいに張ったお湯の表に、赤や黄の小波が立つ。西に面した浴室の高窓にはめこまれたステンド・グラスの模様が映っているのである。長々と体を伸ばしたまま、あの模様は何だろうと考える。ホテルのこの部屋に入った今朝は馴鹿かと思ったが、日が差し込んだいまは翼をひろげた鴉に見える。光の具合でいろんなものに見える騙し絵のようなステンド・グラスなのだろうか。それほど凝った造りとは思えない安ホテルである。浴槽の琺瑯だってところどころ剝げかけているし、床のタイルも黒ずんだり黄ばんだりしている。しかし、こうやって好きなときに入浴できるホテルはやっぱりいい、と風呂好きの乱歩は顎までお湯に浸かって満足だった。

部屋の石炭ストーヴを焚いて、浴室との間のドアを開け放したまま入っているから、一月だというのにちっとも冷えない。芝車町の家だとこうはいかない。板壁の隙間から冷たい風が吹き込んで、洗い場に出て体を洗うのも億劫になる。去年の四月、五年暮らした戸塚源兵衛町から芝へ越したとき、土蔵を改造して書斎にしたついでに、風呂も洋風にしようと思ったのに、妻の隆子が、あれはお湯から上がるとき足が滑って怖いと言うので諦めたが、せめてそれぐらいの夢は叶えさせて欲しい。毎日、毎晩、原稿用紙の桝に字を埋めて稼いでいるのは自分である。こんど新しい家に移ったら、家族用のと自分用のと、風呂を二つ造ろうと乱歩は思った。

本当は、こんなのんびり風呂に浸かっている場合ではない。いまごろ、いろんな雑誌社や出版社では、乱歩がスランプの末、とうとう行方不明になったと大騒ぎしていることだろう。ここにいることは家人にも言っていないし、この先、知らせるつもりもない。だいたい、この大都会の中で人一人消えたところでどれほどの不思議があるというのだろう。いつも決まったところにいなければならないと考えること自体おかしい。ここに訪ねてみえれば、かならずここに居りますなどと世間に約束した覚えもない。それは多少の迷惑を蒙る人もいるだろうが、迷惑ならこっちもいままで随分かけられてきたはずだ。身勝手はお互い様である。と嘯いてはみるが、すぐに不安になる。こんなことを考えるのは、かねがね気にしていた神経衰弱が相当進んでいるのかもしれない。みんなが声をひそめて囁いているように、このまま小説が書けなくなるのではなかろうか。こうしてはいられない。乱歩はのろのろと体を起こし、老人のようにバス・タブの縁につかまってお湯を出た。少し目眩がする。いい気持ちで長湯しすぎたせいかもしれない。しばらく浴槽に腰かけたまま、俯いて目をつぶっている。網膜の裏を黄色い鴉が何羽も飛んで、やがて消えた。すると、春霞が風に吹かれるように、頭の中がすっきりしてくる。乱歩はほっとして目を開けた。このごろ少し肥ってきた両の腿にステンド・グラスの色模様が映っていてきれいである。よく見ると、半開きの腿の間にぶら下がっているものにもその色が映っている。少し揺すってみると、それが青くなったり赤くなったりする。乱歩は笑ってしまった。これは面白い。毎日この時間に風呂に入って、やってみよう。いくらか元気になって立ち上がろうとしたとき、乱歩は自分の股間に妙なものを見た。何か銀色のものが光っている。足を開いて首を曲げ、よくよく見れば、それは幾筋かの白毛ではないか。乱歩は弾かれたように浴室を飛び出し、表のドアの鍵をかけ、部屋の窓のカーテンを引き、それから全裸のまま茫然と部屋の真ん中に立ちつくした。裏の林で嘲笑うように鴉が啼いている。窓から鴉に見られたか。涙がこぼれた。風呂上がりの裸の胸に冷たくこぼれた。昭和九年冬、江戸川乱

歩は、まだ四十歳になったばかりであった。

そのころ、その辺りを麻布簞笥町といっていた。溜池から六本木への大通りを挟んで向かいが三井様のお屋敷のある今井町、裏が市兵衛町一丁目、隣りが二丁目である。乱歩は以前からこの辺りに住んでみたいと思っていたので、去年の夏ごろだったか、「新青年」の水谷準を誘って界隈を散歩したことがある。そのとき見つけたのが〈張ホテル〉だった。チェコスロヴァキアの公使館とフィンランド公使館が向かい合って建っているなだらかな坂の中腹にある、木造二階建ての青い洋館である。桜並木の通りから左に入った露地に、アール・デコまがいの玄関があって、オレンジ色のチューリップの形をした軒燈が昼間から点いていた。水谷準は外人相手の連れ込みだと言うが、二階の窓にハンカチや靴下が干してあるところを見るとそうでもなさそうなので、ついでのことに訊いてみようとベルを押したら、白いワイシャツに黒の蝶タイをきちんと締めた中国人らしい美青年が中から出てきて、途切れ途切れの日本語で、一週間から一ヵ月程度の長期滞在用のホテルだと言う。別に日本人を泊めないわけではないが、客はヨーロッパ人と中国人と半々ほどらしい。「今日、泊マリマスカ？」と首を傾げて笑った青年の口元からこぼれた歯が真っ白で、乱歩は美青年というものは歯まで美しいと感心したものだった。

あれから半年も経っているから、もしかしたらもう故国へでも帰って、いないのではないかと思いながらベルを押したら、おなじ青年が現れたので、乱歩はほっと安心した。向うは自分のことを覚えていないらしく、一週間の宿泊代とか、門限とか、前金のこととか、去年よりいくらか達者になった日本語で丁寧に説明しはじめる。二食付きで週四十円というから安いものである。帝国ホテルならシングル一泊で十円は取られる。車町の家賃が一年で千円だから、それから考えれば高くつくようにも思われるが、一週間の〈秘密〉の代金が四十円なら安いと言わねばなるまい。麗々しく表札を掲げて、あの恥この恥

天下に曝(さら)して月に八十円と、誰にも知られず日の高いうちから風呂に入って月百六十円と、いまの乱歩ならどっちを取るかは自明である。それほど乱歩は草臥(くたび)れていた。

申し訳ほどの宿帳に、素知らぬ顔で水谷準と署名する。所番地は、博文館の日本橋区本町三ノ九としておく。どうでもいいのか、美青年のボーイは見ようともしない。この青年からすれば、頭が薄く、治りきらない鼻を始終ぐすぐすいわせているこんな中年男が、水谷だろうと平井だろうと、不都合など何もない。市電で銀座まで出て、そこからわざわざタクシーに乗り換え、勿体ぶってやってきたのが何だか恥ずかしくなる。その道すがら、誰の名前を使おうか、どこに住んでいることにしようか、などと思案したことさえ滑稽に思えるのだった。乱歩が渡した一週間分の前払いを無造作にポケットに捩(ねじ)込んで、中国の美青年は荷物を両手に提げて先に階段を上がって行く。荷物といったところで、原稿用紙と「小辞林」、大正の終わりから昭和のはじめごろまでの創作メモ帳十冊ばかり、それに洗面道具と塵紙、このごろやたら宣伝が目につくので買ってみたミナト式という鼻の薬、メンソレータムに仁丹などを入れた赤革のボストンバッグが一つと、二、三点の衣類と下着を包んだ風呂敷包みが一つである。周到に計画してのことではなかったから、すぐにもいろいろ不便するだろうが、そのときはそのときで近所の雑貨屋ででも買えばよい。現に、万年筆は三本も入れてきたのに、インクを忘れている。

桜並木の通りを見下ろせる二階がいいと思っていたら、青年が案内してくれたのが正にその部屋だったので乱歩は嬉しくなった。階段を上がってすぐの、二〇二号室。結構繁盛しているホテルらしいから、たまたま空室があったことだけでも運が良かったのに、その上、南の窓のこの部屋に当たるとは、ここのところ不運つづきの乱歩にとって、今日は何ていい日なんだろう。翁華栄(オウファーロン)と名乗る美青年のボーイからキイを受け取った乱歩は、いそいそとベッドの上で荷物をほどき、衣類は隅の洋箪笥に、原稿用紙や書籍類は南の窓に面したライティング・デスクに、日用品と薬はベッドサイドボードに、ゆっくり時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間をかけて整理した。部屋の中央では、翁青年がつけて行ってくれた鋳物の石炭ストーヴが赤々と燃えていて暖かい。そこから鉄板の煙突が天井を横切って窓の上から外に突き出している。通風孔もあるにはあるが、炭酸ガスが怖いから観音開きの窓を細目に開けておく。そういう点、乱歩は慎重だった。誰も知らない秘密もいいが、誰も知らないうちに窒息し、独り白眼を剝いて死んでいたりしようものなら、新聞は喜んで何と書きたてることだろう。

ベッドに大の字になる。静かすぎるくらいの冬の午前である。細く開けた窓の隙間から、下の通りを話しながら行く外国人の声が聞こえる。英語でもない。フランス語でも、ロシア語でもなさそうだ。一人は重く暗い声、いま一人は陽気に甲高い声。この先にチェコスロヴァキアの公使館があるというから、あれはチェコの言葉だろうか。なんだか独り異国の宿にいるような気持ちになってくる。何を捨てにこんな遠くまでやって来たのだろう。捨てるものなど、いったい自分にはあったのだろうか。前住者の残して行った甘い葉巻の匂いが、独りの乱歩をセンチメンタルにする。日向に干した古綿が日差しにだんだんほぐれて行くように、乱歩の体から力が抜けて行く。お湯を出して風呂へ入ろうと考えながら、乱歩はいつの間にか眠ってしまった。

乱歩の黄色と赤の夢——薄檸檬色の光の降る中をきれいな翁青年が、誰かに追われて、こっちへ走ってくる。さっきから手招きしているのに気がつかないらしい。かわいそうに、美青年の裸足の指先は血塗れだ。ふいごのような荒い息を吐いて、後ろからのしかかるように追ってくるのは、ぶよぶよ肥った禿頭の大男である。頭から湯気を上げ、恐ろしい形相をしているのに、目だけが笑っている。嬉しそうに笑っている。わかった。この男が〈張ホテル〉の主人の張という男に違いない。先刻、翁青年に、こ

のホテルの経営者のことを訊ねたら、曖昧に笑って口を濁していたが、二人にはこんな秘密があったのだ。この追う男と追われる男の構図、どこかで見たことがある。乱歩はぼんやり思い出した。あれは、ペヌアという絵描きの描いたプーシキンの『青銅の騎士』の挿し絵だった。ピョートル大帝の乗った馬が前脚を高々と蹴上げ、のめるように逃げる哀れなエヴゲーニーに襲いかかろうとしている。翁青年もエヴゲーニーのように、何か逆らいでもしたのだろうか。やがて逃げ惑う美青年はとうとう檸檬色の光の渦の中、そこだけ小さなハリケーンのように空気が巻き上がっている辺りで大男に捉まり、水膨れの太い腕で羽交い締めにされようとしている。乱歩は物陰から飛び出そうとするのだが、体が金縛りにあったように動かない。人を呼ぼうにも声が出ない。喉にいっぱい何かが詰まっている。口の中から掻きだしてみたら、それは細かい石炭の粉で、その粉は乱歩の肺までびっしり満たしているのだった。そのとき、絶望の乱歩の耳に、忘れもしないあの音が聞こえてきた。地の底から湧き上がってくるように近づいては遠のき、遠のいてはまた引き返してくる、あのドロドロ、ドロドロという、凶事を報らせるアメリカ・インディアンの太鼓に似た音に、もう何年乱歩は悩まされてきたことだろう。書けなくなったのは、あの音が聞こえはじめたころからだった。いまその音は、どうやら大男の太鼓腹の中から聞こえてくるらしく、男が腕に力をこめるたびに、ドロドロ、ドロドロと嬉しそうに腹が鳴る。そのうち胸が潰れたのか、美青年の唇の端から赤い糸のような血が一筋、やがて両眼からも、鼻からもそれは流れ出て、青年の白面は見る見る『国性爺』の和藤内、その紅隈取りのように物凄く変わって行く。

長い、長い夢だった。ストーヴの石炭は消えそうになっているのに、乱歩はびっしょり気持ちの悪い汗をかいていた。ストーヴに石炭をくべ、洋箪笥から下着の替えを出し、乱歩は疲れ切って浴槽の蛇口をひねった。

皮肉なことである。昨日までの薄暗い風呂場なら、眼鏡でもかけて入らないかぎり、あんなものを発見することはなかったろう。昔、名古屋の園井町に住んでいた子供のころ、父親といっしょに風呂に入って、白毛まじりのあそこを目の当たりにしたことがある。狭い五右衛門風呂に二人で浸かっていて、いきなり父親が乱歩の前に立ち上がったのである。目が悪かったので、思わず顔を近づけて見たら、お湯に濡れているはずが、変に固く乾いてそそけ立っていた。その日から、父親を見る目が老人を見る目になった。あのとき父親はいくつだったのだろう。三十数年前の父親の顔を思い出して、乱歩は父親の人生をたまらなく不憫に思った。そしてすぐに、自分が不憫になった。見えない鬼に追われて、こんなところに逃げ隠れて、本当は見つけて欲しいのに意地を張って息を殺していたら、辺りはとっぷり日が昏れて、それでも出るに出られない、乱歩はあそこに哀れな白毛を生やした五歳の童子のようだった。

あとどれくらい、人生の時間は残されているのだろう。漱石はあれだけの数の小説を書いて、死んだとき四十九だった。乱歩は四十歳。漱石とおなじだけ生きたとして、あと十年。有島武郎なら、あと五年。去年死んだ宮沢賢治なんか、まだ三十七だった。人間がいつかは死ななければならないことを、乱歩は急に思い出した。いま死んだらどうしよう。自分の死亡記事のフレーズがフラッシュする。〈大正十二年、『二銭銅貨』で衝撃のデビュー〉、〈代表作は『パノラマ島奇談』『陰獣』〉、〈絶筆は未完のまま中断の『悪霊』〉。そこまで考えて、乱歩は身震いした。『悪霊』が絶筆になるなんて堪えられない。こんなことになるのなら、あれはやっぱり引き受けなければよかったのだ。あの『悪霊』のおかげで、乱歩はここまで追いつめられた。

予定では「新青年」で去年の四月号から連載するはずだった。それがどうにも書けないでようやく始まったのが十一月号。予告ばかりで読者を待たせに待たせたから、誰の文案かは知らないが、その広告

が凄かった。〈果然、俄然、断然、凄然!!〉、〈眠れる獅子、突如沈黙を破る!〉、〈巨人乱歩は劈頭何を語らんとするか? 万人待望のうちに、しづしづと緞帳はあがった!〉。こういう文句が快かったこともある。新聞広告を丁寧に切りぬいては夜中に一人、声に出して読んでみたこともある。そんな気持ちが白々と醒めてきたのは、いつのころからだったろう。おだてられ、乗せられて、愛嬌にっこり振り撒いていたら、ある日、拍手喝采のほんのちょっとの合間から、あのドロドロ、ドロドロという陰気でやりきれない音が聞こえるのに気がついた。雨が近づくと痛みだす神経痛のように、あの音が遠くから聞こえてくると、乱歩の中の何かが、俄かに怯えてうろたえる。

「もういいかい」「まあだだよ」。桜並木の坂道で子供たちが遊んでいる。あの子たちは幸せだ。探してくれる鬼がいる。

このままだと、〈にっこりお化け〉になってしまう。そう思ったら書けなくなった。十二月号、一月号まではなんとか空しい語彙を並べ、おどろおどろの人物たちの顔をちらちら覗かせて誤魔化してきたが、その先はもういけなかった。だいたい探偵小説というものは、発端だけなら誰にだって面白く書けるものだ。幕が開いたら矢継ぎ早の不思議不思議、それらの合間に金銀目眩しの紙吹雪さっと撒いて見せれば、たいていの客は胸ときめかせ、手に汗握ってくれる。そのあと縺れた糸をどう解きほぐし、目も綯な刺繍絵に仕上げてみせるかが作家の知恵、編みこんでいく白金の編み針こそ論理なのである。かといって、この論理さえあれば探偵小説になるかというと、そんなものでもない、むしろ、たとえば些細な思いつき、子供騙しの悪戯、本筋にほとんど関わりのない饒舌、そんなどちらかといえば辻褄の合わない非論理的なものたちが混じり合い、絡まり合って、探偵小説という一つの奇体になる。探偵小説

は奇体である。だから構成もトリックも未だできていないのに、ふと題名一つ浮かんだ途端、瞬時のうちに物語の発端から大団円まで見えてしまうことだって時にはある。以前の乱歩は、よくそういうことがあった。『人間椅子』がそうだったし、『押絵と旅する男』も確かそんな気がする。まるで天から降ってきたみたいに数個の文字が目の裏に閃き、それが見る見るうちに中空に舞い上がって、仄暗いロマンの実を結ぶ。あれさえ戻ってきてくれたら……乱歩は痛切にそう思った。

あれが、あった。乱歩は芝車町の家を出るとき、何気なく鞄に入れてきた昔のメモ帳を、宝物のように取り出してみる。大正十三年から十四年の辺りに、あのころ遊び半分に思いついた題名らしいものが、細かい字でビッシリ書いてある。中には、なかなかいいのがある。どうして使わなかったのだろう。いま書いている『悪霊』だの『人間豹』だのより、よほどときめくものがある。「逃げ水女郎」「木乃伊の心臓」「三人道成寺」「雲母綺譚」。蒼白かった乱歩の頬が紅潮してくる。「髑髏湯で聞いた話」「啜り泣く遺伝子」「侏儒祭」。窓のカーテンを閉めきって暗い室内なのに、乱歩の目の前に木洩れ日がキラキラと降りかかる。十年前の自分の文字が、魔法のインクで書いたように金色に輝いて見えたのである。

「庄野笙子」というのがある。これは覚えている。ポオの『ウィリアム・ウィルソン』をもじってみようと思ったのだ。海外の探偵小説を読み漁っては、その一つ一つに影響されていたころである。大正十四年に書いた『赤い部屋』にしたって、あれは別に赤でなくてもよかったし、七人の男たちが集まるのがそんな部屋である必要もなかったのだが、ミルンの『赤い館の秘密』とルルーの『黄色い部屋』が好きだったから、とにかく『赤い部屋』にしたかっただけの話である。

次の「人間蠟燭」。これは囚人たちの体を、薄い金箔貼りつけた布で木乃伊のようにぐるぐる巻きにし、その頭頂に大蠟燭を立てて燭台に見立てるという趣向を考えたのだが、書こう書こうと思っているうちに昭和三年、小酒井不木が『死体蠟燭』という妙な話を書いてしまったので断念した覚えがある。

不木のは、死臭にとり憑かれた和尚が人間の死体から脂肪を抜き取り、それを固めて蠟燭を作るという気味の悪いもので、乱歩の発想とはまるで違うのだが、題名がなんとなく似ているので、嫌気がさしてやめてしまった。

「消えた葬列」「丑三つ太郎」「過去帳の中の女」「厭人倶楽部」「初荷の中」……こんな題名でならいまでも書けるかもしれない。萎えた力が蘇るかもしれない。乱歩の下腹部が熱くなった。群がる白毛の中からそそり立つものが確かに感じられた。乱歩は三本の中でいちばん太い万年筆を握り、メモ帳の最後のページにあった題名を、原稿用紙に大きな字で書いた。

『梔子姫』

そのとき、誰かがドアを三度ノックした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com